

21世紀の「知識基盤社会」が、私たちの教育に新たな変革を求めている

今日の生徒たちが未来で成功するために本当に必要な力とは何か？ 従来の教育モデルは、その問いに十分に答えられているだろうか。

- ICTの進展により、社会は情報で溢れています。単に知識を得るスキルよりも、情報を取捨選択し、他者と協働しながら新たな知識を「創造」するスキルが不可欠になりました。
- 私たちは、多文化共生、地球温暖化、資源問題など、答えのない複雑な課題に直面しています。これらは「知のギャップ問題 (Ingenuity Gap)」と呼ばれ、一人ひとりが知恵を出し合い、解決に貢献することが期待されています。
- このプレゼンテーションでは、こうした時代背景に応えるための新しい教育パラダイムと、その具体的な実践方法を探ります。

世界が定義する「21世紀型スキル」：私たちが育むべき10の力

国際団体ATC21S（21世紀型スキルの評価と教育プロジェクト）は、これからの社会で必須となるスキルを4領域10項目で整理しました。これは「目標解決のために他者やテクノロジーと協働して知識を創造し続けるスキル」と言えます。



思考の方法

- 1. 創造性とイノベーション
- 2. 批判的思考、問題解決、意思決定
- 3. 学び方の学習、メタ認知



働く方法

- 4. コミュニケーション
- 5. コラポレーション（チームワーク）



働くためのツール

- 6. 情報リテラシー
- 7. ICTリテラシー



世界の中で生きる

- 8. 地域とグローバルのよい市民であること（シチズンシップ）
- 9. 人生とキャリア発達
- 10. 個人の責任と社会的責任

教育のパラダイムシフト：知識を「習得」する時代から「創造」する時代へ

21世紀型スキルを育むには、授業の根本的な設計思想を変える必要があります。学習科学の領域では、この変革を二つの対照的なモデルで説明しています。

知識習得モデル (Knowledge Acquisition Model)



- アプローチ：後戻りアプローチ (Backward Approach)
- 考え方：知識は教師から生徒へ一方的に与えられるもの。生徒は「空の容れ物」。
- 目標：定められた知識やスキルを効率よく覚えさせる。

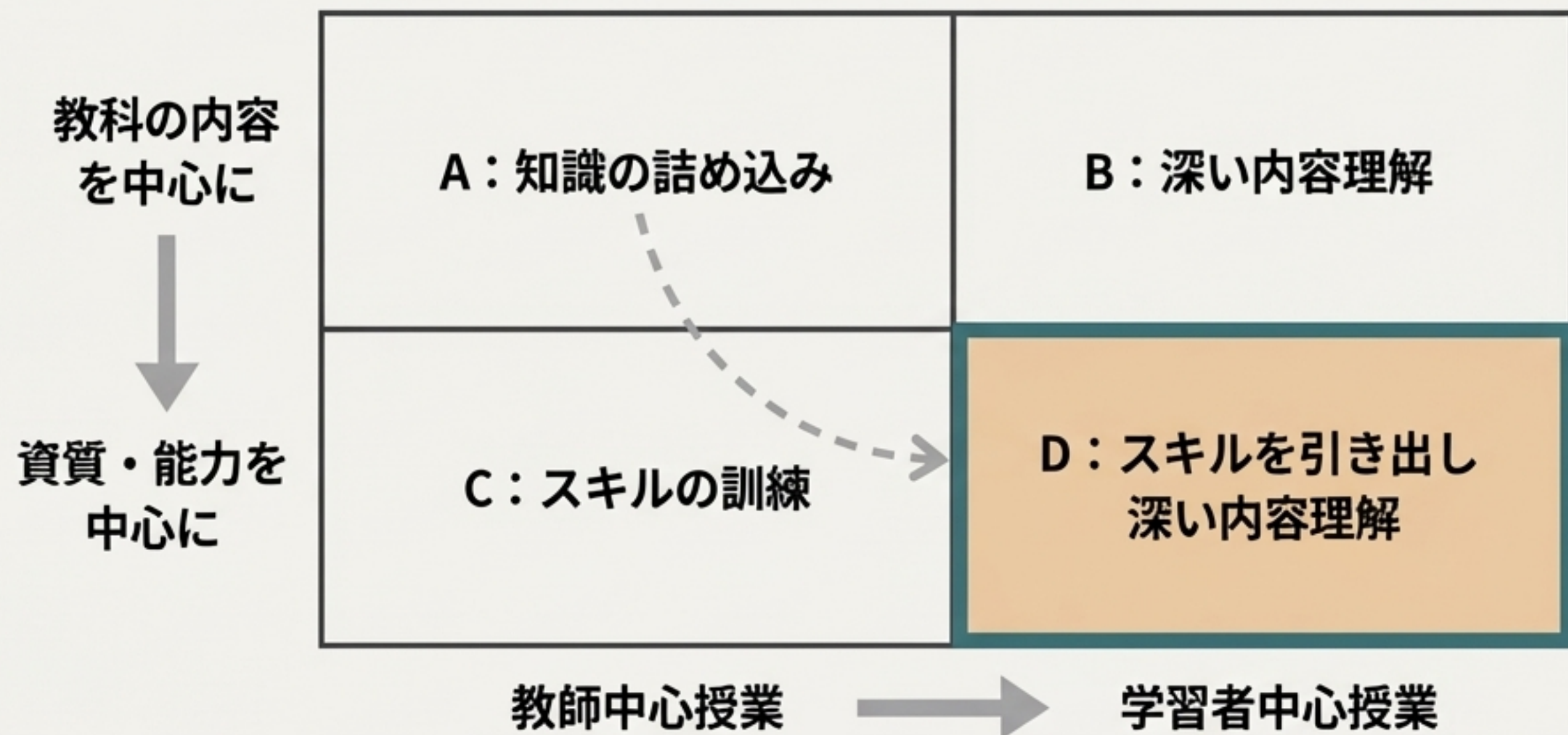
知識創造モデル (Knowledge Creation Model)



- アプローチ：前向きアプローチ (Forward Approach)
- 考え方：知識は社会的に構成されるもの。生徒は他者との協働を通じて知識を自ら創り出す。
- 目標：生徒が持つ能力を発揮させ、さらなる探究を生み出す。

私たちの授業はどこにあるのか？4つの知識観で現在地を把握する

授業を「教育課程の軸（何を教えるか）」と「教育方法の軸（どう教えるか）」で分類すると、4つのタイプに分けられます。私たちが目指すべきは「D」型の授業です。

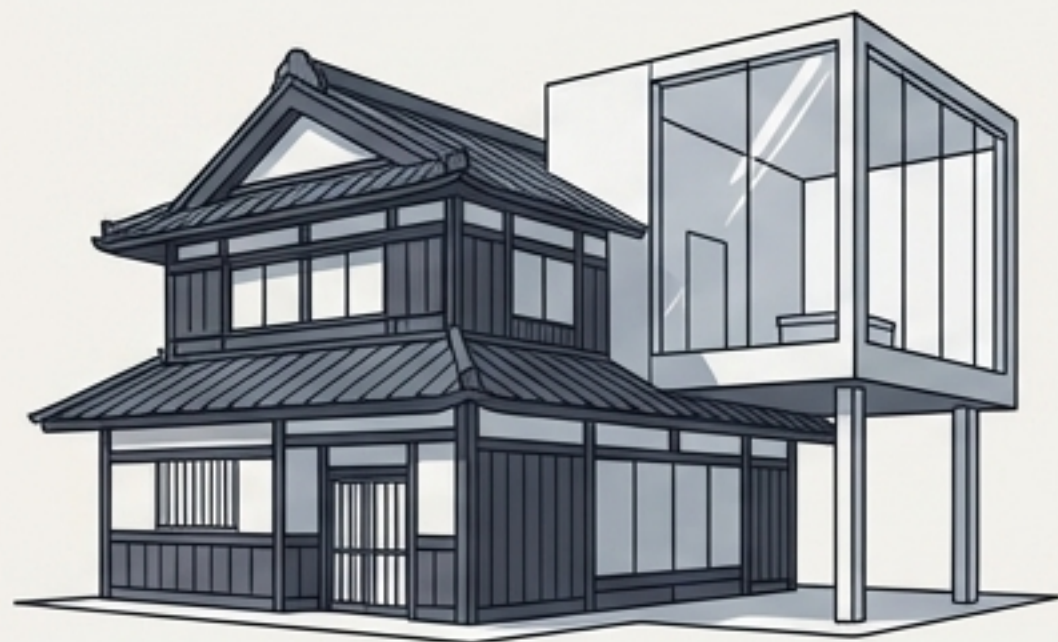


多くの学校現場では、まず基礎基本として「A」で知識を詰め込み、次にスキル訓練として「C」を行う「A+C」の組み合わせに留まっています。これでは生徒の主体性は育ちません。

授業改革は「付け足し」ではない。教育課程全体の「変容」を目指す

「D」型の授業を導入するにあたり、二つの異なるアプローチが存在します。真の変革には、カリキュラム・マネジメント全体、~~策~~見直しが不可欠です。

付加型モデル - Additive Model



- 説明: 従来の「A」「B」「C」型の授業が中心の年間計画に、一部だけ「D」型の授業を追加するアプローチ。
- 課題: 根本的な学習体験は変わらず、知識創造が単発のイベントで終わってしまう。

変容型モデル - Transformative Model



- 説明: 「D」型の授業を主体として教育課程全体を設計し直し、「A」「B」「C」型の授業時数を可能な限り減らすアプローチ。
- 目指す姿: 学校全体の教育課程を通じて、生徒たちの学びが常に「知識創造」につながるようになる。

実践事例：小学2年生の音楽鑑賞授業を 「知識創造」の場に変える

「D」型の「前向き授業」は、発達段階の低い小学生には難しいのでしょうか？
決してそうではありません。
適切な課題設定と支援があれば、低学年からでも
資質・能力を存分に発揮させることができます。

- 学年: 小学校2年生
- 教科: 音楽（鑑賞）
- 主教材: 「くまばちはとぶ」（描写音楽）
- 学習課題: 「はちがとんでいるようすにあう楽器をみつけよう」
- 使用ツール: 1人1台のタブレット端末
- 提示コンテンツ: 3つの楽器（フルート、トロンボーン、マリンバ）の演奏動画



同じ教材、同じ課題。授業デザインの違いが 学びの質をどう変えるか

知識習得型授業案「B+A」型	知識創造型授業案「D」型
1. クイズ：曲が表す虫を当てる（オーケストラ鑑賞） 2. 楽器選択：教師がスライドで楽器を提示。聴き比べて「はちのようす」に合う楽器を選ぶ。 3. 発表とまとめ：生徒が選んだ理由を発表。教師が音色の特徴を結びつけて理想的な解をまとめる。 4. テスト：楽器の音あてテストで理解度を確認。	1. クイズ：曲が表す虫を当てる（オーケストラ鑑賞） 2. 楽器選択：生徒が自分のペースでタブレット内の動画を視聴・比較し、楽器を選ぶ。 3. 対話と再吟味：違う楽器を選んだ友達に理由を質問しに行く。対話を通して自分の考えを吟味し、再度鑑賞する。 4. 発展的鑑賞：楽器による表情の違いを楽しみ、新たな疑問（「もっと合う楽器はないか？」）や視点（「かわいくまばち」）を発見する。

「D」型授業が引き出すもの：正解の受容から、意味の探究へ

「B+A」型では、教師が比較し、生徒が答えを受動的に聞く活動に陥りがちです。

「D」型では、生徒同士の対話が学びの中心となり、知識創造活動へとシフトします。

教師の役割の変化

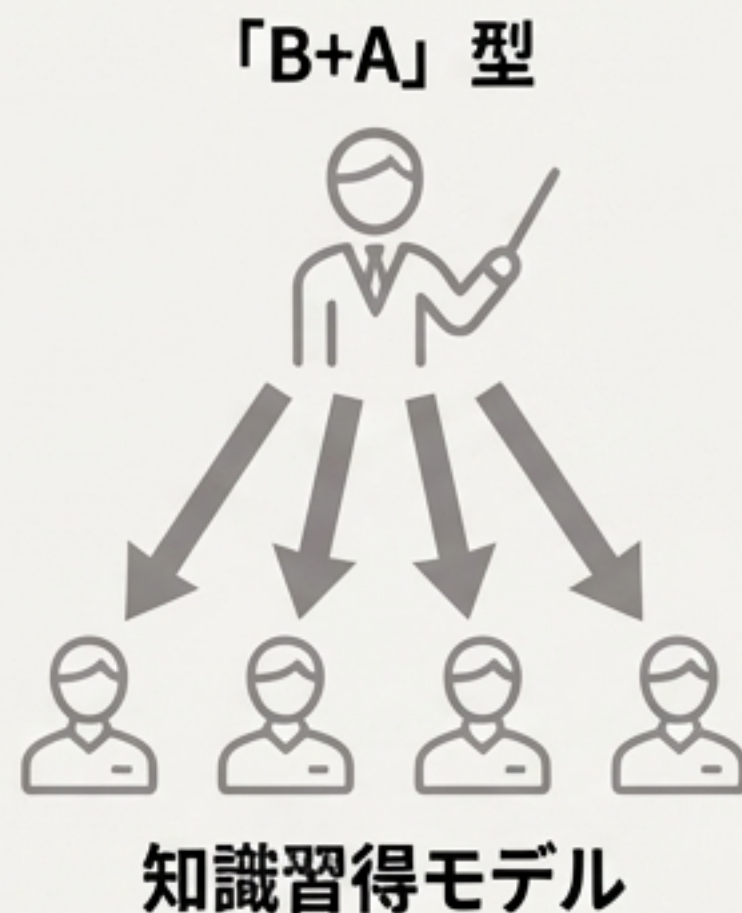
Before:

知識を整理し、価値付けし、伝える（「この説明はいいね」）。

生徒の活動の変化

Before:

受動的に教師のまとめを聞く。音楽が得意な子の意見が全体に共有される。



教師の役割の変化

After:

生徒同士の対話を仕組み、新たな問いが生まれる文脈を設定する。

生徒の活動の変化

After:

主体的に友達の考えを聞きに行く。他者との比較から自分の考えを再吟味する。

The Outcome

生徒は「友達はかわいいくまばちを考えていたから、選んだ楽器が違った」というように、多様な解釈に気づきます。楽器の知識を習得するだけでなく、演奏形態による曲の表情の違いを**楽しむ力**そのものが伸びていきます。

教育モデルの変革には、評価の変革が不可欠である

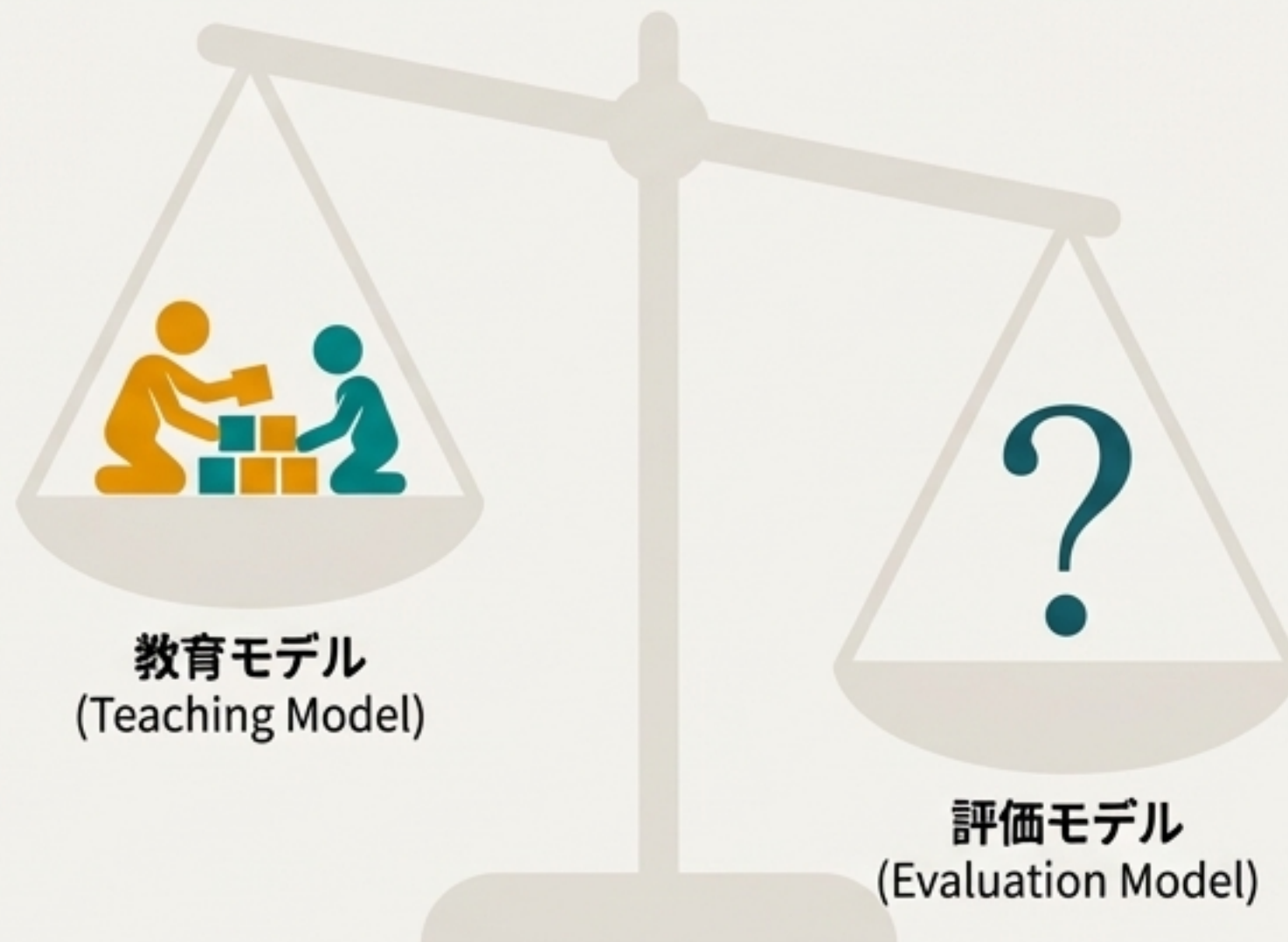
「知識創造モデル」への移行を成功させるには、学習成果の測り方そのものを変えなければなりません。従来のテスト中心の評価では、生徒の真の成長を捉えることはできません。

旧来の評価 (Backward-Looking Evaluation)

目的: 学習の「達成度」を測る。

手法: いわゆる「テスト」。

焦点: 学習の終着点。



これからの評価 (Forward-Looking Evaluation)

目的: 次の学びに「つなげる」。

手法: 学習プロセスそのものを捉える。

焦点: 学習の連続的なサイクル。

未来の学びにつなげる「変容的評価」とは何か

「変容的評価」とは、形成的評価を軸とし、生徒が何を知り、何ができるようになり、対話の中で思考がどう変化したかを連続的に捉える評価方法です。ゴールは固定ではなく、探究の進捗に応じて再設定されます。

How It Works in Practice（実践における仕組み）

- データの収集: 学習計画表や振り返りワークシートへの記述、発表などを通して、一人ひとりの知識創造のプロセスを記録する。
- 評価の対象: その時点での生徒の「考え」や「理解」そのものと、その「変化」。スキルと知識は一体的に評価する。
- 評価の目的:
 1. 生徒への支援: 一人ひとりの状況を把握し、個別最適な支援を検討する。
 2. 教師の授業改善: 次の授業計画へのヒントを得る。
- Key Concept
評価したいのは、生徒が「活動を通して資質・能力を発揮し、深い理解に到達できたか」そして「新たな疑問や探究が生まれたか」です。



21世紀型教育を実現するための、3つの重要な視点



1. 学習観のシフト (Shift in Learning Perspective)

From: 生徒を知識で満たす
「知識習得モデル」

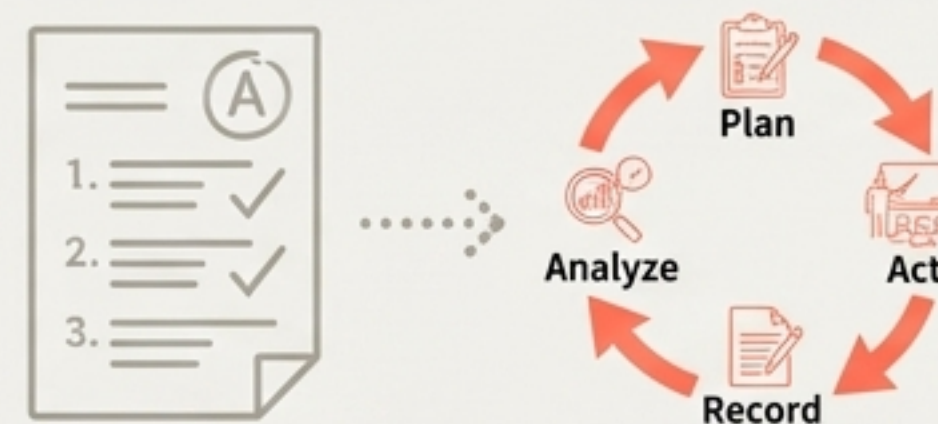
To: 生徒が協働して知識を創り出す
「知識創造モデル」へ



2. カリキュラムのシフト (Shift in Curriculum Design)

From: 新しい活動を付け足す
「付加型モデル」

To: 教育課程全体を再設計する
「変容型モデル」へ



3. 評価観のシフト (Shift in Evaluation Perspective)

From: 達成度を測る
「後向きのテスト」

To: 次の学びへつなげる
「前向きの変容的評価」へ